

枕草子、前田本、堺本の成立

—古典の本文批判

高橋 貞一

枕草子の伝本は、三巻本と前田家本、堺本の三種が代表的な分類である。普通この枕草子の三巻本の段数を三百一段とする（総索引等）。他に藤村作編至文堂刊本は二百九十七段とする。その中間に増補した段が巻末にある。これに対して前田本は、前田家尊経閣文庫蔵の鎌倉時代の古写本四冊である。巻頭の文字によりて、

はるはあけほのの巻

正月一日の巻

北白河の巻

めでたき物の巻

附録（堺本下巻）

である。

堺本は、上下二巻からなり、上巻は、「……は」「……もの」という類形にまとめられ、下巻は、その他の文を集めたものである。堺本の名称は、平成八年十月刊、古典文庫

影印の高野辰之博士旧蔵本の奥に、

此草子ハ、深養父孫元輔の御娘にて上東門院にこうせしとぞ、清少納言局と号して、紫式部と名をおなじく誉たかく人の口にあることども、世の行によしあるわざをしるしあつめられたる也、いやしくもゆかりのゆへをもつて、先祖の遺文人ありてたづねはいかゞこたへ侍らんかしと、泉の堺に世にそむきたるわざして、いとまのあるを幸として好事の佳士道巴といふ翁の心の月をすまし身のさとり明なるが持なれたる本をしばかりもちゐて書写しむる所なり、古本一とせ祖父にておはせし後浄居院殿能州へ下しめたまひし時、太守匠作とくみん所望によりてつかはされしより仰られしこそまのあたり耳にあるやうに覚えて、くり返みるに、女房のもてあそふべきことはり、男のしらでかなはざるわざなるべし、あなかしこ、よみおほえずはあるべ

からず

時に元亀元年十一月日

宮内卿清原朝臣

とあるによりて名づけられた本である。私の堺本との出会いでは、昭和十六年田中忠三郎氏の蔵本を借覧して転写したのが機縁であつた。この転写（ノート）を田中重太郎氏に貸出したことがあつた。この書は後に田中家より出て田中重太郎氏の有となり、田中重太郎氏によりて笠間書院より影印された。朽木文庫旧蔵である。田中重太郎氏が影印された堺本の解題に、

清少納言枕冊子の成立論あるいは本文研究上、第一、義的なものとは考えられないものであると思つてゐる。

たゞその存在は既存枕冊子諸本の本文研究、語彙語法研究上はもちろん、作品の成立論にも大きな価値をもつものと考えられるので、その善本を翻印し、広く読まれることは、枕冊子研究上意義のあることと思ひ……

と述べ、校本枕草子に翻印対校した諸本とし十一本をあげている。

以上の三本の関係を更に考察してみようと思ひ、私の見解を述べるものである。

前田本の分類として、春はあけぼのの巻をみるに、「…

…は」の段の順序が三巻本と全く異なることが注目せられる。三巻本を原形とすれば、それをどの様にならべるかが問題である。

はるはあけぼの、ころは正月三月、（せちは）正月一

日……九月九日、夏は、冬は、

三巻本の一、二、三七にあたり、

日は、月は、ほしは、雪は、きりは、かぜはあるものは

三巻本の二三六、二三七、二三八、二三九、一九〇、二三五にあたり、天文氣象である。次に、

山は、みねは、をかは、野は、はらは、もりは（三巻本七所、前田本二十六所、堺本十所）

三巻本の一、一三、二三四、一六四、一四、一〇八にあたる。これは地理的關係のものである。一定の意図の如くに見るべきであらう。しかしその本文をみると、「かぜは」については、

あらし、木からし、三月ばかりのゆふぐれ……かほにしみたるこそいみじうをかしけれ

とあつて、三巻本に略同じ。堺本の上巻では、前田本の順序とは全く異なり、

春は、せちは、ふるものは、風は、きりは、菊の花はとあり、三巻本の一、二、三七、二三五、一九〇、三五に

あたる。前田本は以上のごとく独自の順序によりて進め、最後の方は、

そくたいは、したかさねは(二六八)、かりきぬは(二六六)、さしぬきは(二六五)夏のうはきは、からきぬは(一本七)、もは(一本八)、あふぎのほねは(二六九)、かみのいろは、ひあふきは(二七〇)、おりものは(一本一〇)、もんは、うすやうは、すぐりのはらは(二本一三)、ふでは(二本一四)、すみは(一本一五)、かゞみは(一本一八)、くしのはこは(一本一七)、をけは(二本二〇)、たゞみはとある。この中に、一本の段の文があることは注目すべきことで、三巻本に増補された以後の成立と認められよう。次に正月一日の巻についてみるに、春はあけぼのの巻、後のめでたき物の巻以降を抜書した巻である。カッコ内は三巻本の番号、

正月一日(二)、三巻本と大差あり、七日は(二)

三巻本と差があり、七月の條に、

いかはかりなる人その人をかく。たちならすらんと思やるおかし。みかとのおはしますらんさまなど思やりまいらせて、えむのまつはらといふ人はなければどすゝろにねたけれ、いとせばきほどに、とねりのかほのきぬきもあらはれ、しろきものゝゆきつかぬところはま

ことにくろきには、ゆきのむらく、きえのこりたるこゝちしていとみくるし、むまのあがりくるふもいとおそろしくおぼゆればひきいられてようもみえず、八日は……

とある。堺本は巻上、七日の日はの條、「いかばかりなるひと、こゝの人をかくたちならすらむとおもひやるかし」にて終る。三巻本の前半である。かくの如く前田本、堺本はそれぞれに異なるので、何れを三巻本に近いかは決定し難い。

正月てらにこもりたる(二一六)

三月三日は(三) 堺本に同文

四月ころもかへいとをかし 堺本に同文、

よろづよりもわびしげなるくるま(二二)

五月ばかりに山里へ(二〇九)

五六月のゆふつかた(二二一、二二〇)

しのびたる人のかよふ(六九)

いとあつきほど(二二〇)

とあるように、月日の推移によって構成したと認められる。

六月つごもり

七月十よ日ばかり(三四)

七月つごもりがた(四二)

八月ばかりに

のわきしたるつとめて（二九二）堺本同文

九月ばかりに（一二五）堺本同文

おなじ月のつごもり（一二五）堺本同文

しも月のついたちごろ（三卷本ナシ）

ゆきのいたくふりたるひ（一七六）堺本同文

冬のいとさむきに（六九）堺本同文

だいろは五節のころ（八六）

かもの一のはしこそ 堺本同文

おほかたほそとのゝつばね 堺本と異なる

十二月十日の月 堺本同文

わかき人のかみ 堺本と差あり

またいみたがへ 堺本同文

せちぶんたがへ（二八一）

つごもりの夜は 三卷本なし

人のむことその御てとは 堺本同文

返にめでたきものは

こむ源六の御屏風こそ（二七八の一節）

いみしうさむきに（二七四）

よろこび申こそ 三卷本なし

内のつばねは（七二）堺本同文

ほそ殿ゝやりとを（二三三）

ほそ殿に人々あまた（四四）

（中略）

道心あるはいとよき事（三二）堺本同文

おもはむ子を法師に 堺本に略同文

ありがたきこゝろあるものは 堺本同文

をのこはまた隨身こそあれ（四六）

つねにふみをこする人の（二七七）

人のずき 三卷本なし

よろづの事よりも 三卷本なし

よにわびしくおほゆる事は 堺本同文

ふねのみち（二八八）

女のひとりすむ家（一七三）堺本同文

宮つかへ人のさと（一七四）堺本同文

人のむすめみぬ人

人のかほのとりわきてよし 堺本同文

十八九ばかりなる人（一八三）堺本同文

おもやうよき人（二七七）

また宮のかきくらしあるに（二七六の一節）堺本同文

わかき人の……

人のうへいふとて 堺本同文

女はみやつかへすとも（二八六）

みやつかへ人なと 三卷本なし

とのもつかさこそ（四五）堺本同文

人のまへちかうゐて 堺本に近し

いまはじめているべきことにはあらねど 堺本同文

すべりきたなけ 堺本同文

たくみのものくふ 堺本同文

うちふりたるいゑ 三巻本なし

ときは木ども (六二の一節)

五月のしやうぶ

よくたきしめたるたきもの (二一七)

といった順序に列記してゐる。その順序は一定の方針といったものはなさそうであるが、問題点は堺本と同文の文が多い点である。三巻本の順序とは関係がない。次は白河の巻である。

小白河 (三三)

みたけにまうづるみち (一一五) 宣孝の事あり

みやにはじめてまいりたるころ (一七九)

大納言殿まいらせ給て (二九五)

僧都のきみの御めのと (二九六)

かがへくだるといひたる人に (三〇〇)

ある女房の (二九八)

びんなきところにて (二九九)

かたちよききむたち (四三) 三巻本四二の最後

院の御はて (一三三)

関白殿くるとより (二二四)

せいりやう殿のうしとらのすみ (二二)

おひさきなし (二二)

ほだいといふてら (三二)

二月つごもり (一〇二)

みやの五節 (八六)

御仏名のまたのひ (七七)

御ゑゑなどのすぐれたるにはあらねど 三巻本なし

すけたゞは (二三〇)

御前などにて (二六一)

関白殿二月十日のほど (廿一日、三巻本)

しげいしや (一〇〇)

なりふさの中将 (三七六)

雪のいたうふりたるを (二六二)

三月ばかりに (二八四)

きよ水にこもりたるころ (二二七)

右衛門ぜうなるもの (二八九)

ふの殿のはうへ (二九〇)

うへの御つぼねのみす (九〇)

五月御さうじのほど (九五)

御方々君たちうへなど (九七)

中納言殿まいらせて (九八)

以上である。

最後に第四冊、めでたき物の巻がある。

めでたき物 三巻本と差あり（八四） 堺本と全く異なる

うつくしき物（一四六）

なまめかしき物（八五）

あてなる物（四七） 堺本なし

めもあやなる物 三巻本なし

きよしとみゆる物 三巻本、堺本なし

きらきらしき物（二七八） 堺本なし

うれしき物（二六〇）

心ゆく物（二九）

こゝちよげなる物（七六）

うらやましき物（一五三）

たのもしき物（二四九）

ありがたき物（七二）

あはれなる物（一一五） 宣孝の御嶽精進のことなし

（堺本同じ）

心にくき物（一九二） 堺本と異なる

こゝろときめきする物（二七）

むねつぶるゝ物（一四五）

あさましき物（九三）

心もとなき物（一五五）

はるかなる物（一〇〇）

おぼつかなき物（六七）

とくゆかしき物（一五四）

あえなき物 堺本に同文、三巻本なし

さはがしき物（二四〇）

心ゆるびなき物 三巻本なし

たゆまるゝ物（二四）

つれづゝなる物（一三四）

つれづゝなくさむる物（一三五）

きゝにくき物（一本三）

かたはらいなき物（九二）

はつかしき物（一二〇）

いひにくき物（一〇六）

ほいなき物 堺本あり、三巻本なし

くちをしき物（九四）

すさまじき物（二三）

はしたなき物（一二三）

あぢきなき物（七三）

たのもしげなき物（一五九）

むとくなる物（一二一）

心つきなき物（一二七）

ねたき物（九二）

にくき物（二六）

いとをしげなき物 三巻本なし

くるしげなき物（一五二）

むつかしげなる物（一五〇）

あつげなる物（一一九）

まづしげなる物 三巻本なし

いやしげなる物（一四四）

わびしげにみゆる物（一一八）

みぐるしき物（一〇五）

みるかひなき物（又一本、三巻本の補遺） 堺本同文

ないがしろなる物（二四一）

ことばなめげなる物（二四二）

したの心がまんすべき物（一本の文） 堺本なし

にげなき物（四三）

ふと心をとりにしてわろくおぼゆる物 三巻本なし

人にあなづらゝ物（二二五）

ことに人にしられぬ物（二四五）

とり所なき物（一三六） 堺本なし

たとしへなき物（六八）

とをくてちかき物（一六二）

ちかくてとをき物（一六二）

たゞにすぎにすぐる物（二四四）

おほきにてよき物（二一九）

みしかくてありぬべきもの（二二〇）

ゑにかきてまさりするもの（二二三）

かきをとりする物（一一二）

夜まさりする物（一本二）

ほかげをとりする物（一本二）

人のいへにつきづきしき物（二三一）

したりがほなる物（一八〇）

物のあはれしらせかほなる物 三巻本、堺本なし

みならひする物（三八七）

なまけしからぬゑせ物 三巻本、堺本なし

さかしき物（二四三）

人ばへする物（一四七）

えせ物のところうるをり物（一五一）

身をかへたりとみゆる物（二三二）

むかしおぼえてふようなる物（二五八）

すきにしかたこひしき物（二三八）

つねよりことにきこゆる物（一一一）

ことくゝなる物 堺本なし

せめておそろしき物 他本なし

おそろしげなる物（一四二）

名おそろしき物（一四八）

きたなき物 堺本なし

いみじうきたなき物（二四七）

みるにことなる事なき……（二四九）

めでたき物、人の名につきて…… 三巻本なし

三巻本と記述の順序が異なり、又堺本とも順序の異なる点は注目すべきである。さて前田本として特に考究すべき事は、三巻本にあつて、前田本になき章段である。左にそれを示せば、

四	一九	四七	五二	五三	五四	五五	五六	五七	六〇	七八
〇七九	〇八〇	八二	〇八三	八七	八八	八九	九六	一〇一	一〇四	一〇九
一一〇	一二二	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三七	一三八	一四〇
一四一	一四三	〇一五六	〇一五七	一七二	一七五	一七七	一七八	一八二	一八六	一八七
一八八										

○を附した段は長文である。

四七	五四	七八	七九	八〇	八三	一三八	一五六	一五七	二〇七	二四六
職の御曹司の西面……	殿上の名対面こそ……	頭中将のすゞろなるそら言……	かへる年の二月二十余日……	里にまかでたるに……	職の御曹司におはしますころ……	殿などのおはしまさで後……	故殿の御服のころ……	宰相の中將齊信宣方の中將……	笛は横笛……	文のことばなめき人こそ……

二〇〇	〇二〇七	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二五	二二六	二二五	二二六
二三二	〇二四六	二四八	〇二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	
二五七	二五八	二五九	二六三	二六四	二六七	二七五	二八〇	二八三		
二八五	二九一	二九二	二九四	二九七	二九八	二九九	三〇一			

二五〇 いみじうしたてて……

これらの長文の脱落したことは、前田本の成立に不完全となるべき事由があつたと認めざるを得ない。

堺本は、上下で、上巻は「……は」を列挙し、

春は、夏は、秋は、冬は、ころは

までは、三巻本に略同じであるが、次に

せちは、五月五日、七月七日、九月九日もおかしとある。正月七日、十五日、三月三日の事なし。後出。次に、

ふるものは（二三五）、風は（一九〇）、きりは（なし）、木の花は（三五）、花の木ならぬは（三八）

と続き、三巻本の順と異なり、前田本の順とも異なる。次に続くものを少し示せば、

草の花は（六四）、とりは（三九）、むしは（四一）、山は（一一）、みねは（一二）、野は（一六四）、はらは（二四）、をかは（二三四、堺本しのびのをかのみ）前後は、

つかさは（一六五）、殿上人は（一六六）、すりやうは（一六七）、権守は（一六八）、やまひは（一八三）、女のみやつかへするところは（一二七）、みものは（二〇八）

とあるが、文は三巻本とも異なる所がある。これを示せば、

行幸さら也、春のも冬のも、りんじのまつり、いと

なまめかしくおかし、まつりのかへき、あをむまは、おほくはうちにてみるは、いとせばきへいのうちなれば、とねりどものかほの、きぬにもあらはれて、しろきものゝより、つかぬところは、くろき庭に雪のむらきえたる心地してみぐるし、むまのあまりちかくてあかりさはぐもいとおそろしくて、えよくも見ず、ひきいられぬかし、

正月の一日、三月の三日うらゝかにてりたる、五月五日はやがてひしゝとくもりくらしたる、七月七日は、つとめてひるまではくもりて、夕かたよりははれて、やうやう空に雲なくなりもて行て、くれはつれば、月いとあかくてり、まして夜ふくるまゝに、ほしのすがたあらはにみえたるこそおかしけれ、九月九日は、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたく、おほひたるわたなどいとうぬれたるぞ、うつしのかまさりて、おかしき、つとめてはやみたれど、空はなをくもりて、やゝもせばふりおちぬべく見えたるいとおかし

とある。三巻本（八）に増補された文と云へようか。原本を自由に改作してゆくのは本文批判よりみれば、もはや研究の対象としては論外の異本である。右の文は前田家の

「はるはあけぼの巻」の文に類する。

次は「……もの」の文である。

めでたきもの（八四）

きさいのみやはじめ、またやがて御うぶやのありさま、行けいのおりなど、みこしよせて「名たいめむなどしたるほど、いとめでたし、そのころのいちの人の御かすがまうで、さらぬ御ありきもめでたし、今上一宮などやうに、やんごとなきみこたちの、まだわらはおはしますを、いだきあつかひたてまつる、おむおほぢはさら也、おちなどにてても、見たてまつりたまへるこそ、よにめでたけれ……

とありて、三巻本と全く異なる文である。

なまめかしきもの（八五） 増補より

めもあやなる物（又一本の補遺）

うつくしき物（二四六） 簡略

ねたきもの（九一）

かたはらいたきもの（九二）

あへなきもの（九三）

くちおしきもの（九四）

すゑはるかなるもの（一〇三）

いひにくきもの（一〇六）

いやしげなるもの（一四四）

むねつぶるゝもの（一四五）

ひとばんするもの（一四七）

なおおそろしきもの（一四八）

みるはことなき物……（一四九）

むづかしげなるもの（一五〇）

ゑせものところうるをり（一五一）

くるしげなるもの（一五二）

うらやましきもの（一五三） 三巻本より詳し、前田本

とも異なる所あり

とくゆかしきもの（一五四）

心もとなきもの（一五五）

このあたり十段は三巻本と順序同じ。注目すべき所である。文は必ずしも同一ではない。従つて堺本の成立には三巻本が基盤であつたことは明らかである。

むかしおぼえてふようなるもの（一五八）

とほくてちかきもの（一六二）

ちかくてとほきもの（一六一）

たのもしきもの（二四九）

たのもしげなきもの（二五九）

心にくきもの（一九二） 三巻本の五七段の文が入る

きたなきもの（二四七）

ふと心おとりしてわるくおぼゆるもの（一八八）

ないがしろなるもの(二四一)

よまさりするもの

ほかげおとりするもの(一本二)

○さわがしきもの(三巻本なし)

○心ゆるびなきもの(三巻本なし)

つれづれなるもの(一三四)

もののあはれしりかほなるもの(八二) 増補あり

人にあなづらるゝもの(二五) 増補あり

○すさまじきもの(二三) 三巻本より詳し、増補あり

○にくきもの(二六) はへは三巻本虫はに出る、三巻本

になき事あり

心ときめきせらるゝもの(二七)

見るにつけてすぎぬるかたこひしきもの(二八)

○心ゆくもの(二九) 三巻本と差あり

○うれしきもの(二六〇)

いひしらずいふかひなくとり所なき物(一二六)

じたの心がまへわろきもの(一本五)

○見ぐるしきもの(一〇五) 一部類似

もじにかきてあるやうあらむに……(一本四)

きゝにくきもの(一本三)

見るにおそろしげなる物(一四二)

きよしと見ゆるもの(一四三)

わびしげなるもの(一一八)

あつげなるもの(一一九)

つれ／＼なぐさむもの(二三五)

つねよりことにきこゆる物(一一一)

めでたきものの人のなにつけていふかひなくきこゆる

もの 三巻本なし

ゑにかきておとるもの(一一二)

ゑまさりするもの(一一三)

おなじことなれどもきくみゝことなるもの(四)

ありがたきもの(七一)

あぢきなきもの(七五)

心地よげなるもの(七六)

おほきにてよきもの(二二九)

みしかくてよきもの(二二〇)

人の家につきづきしき物(二二二)

○さかしきもの(二四三) 三巻本と大差あり

みるかひなきもの(又一本に類す)

あてなるもの(四〇)

まづしげなるもの(又一本に類す)

ほいなきもの(又一本に類す)

○したりかほなるもの(一八〇) 三巻本と大差あり

おぼつかなきもの(六七)

たとしへなきもの（六八）

○みをかへたりと見ゆるもの 三巻本なし

はづかしきもの（一二〇）

むとくなるもの（一二一）

はしたなきもの（一二二）

あはれるもの（一二五）

○にげなきもの（四五）三巻本と大差あり

○心づきなきもの（一一七）

以上は、「……もの」の類である。

次に、

正月ついたちには……（三）

十日のほど（一三九）

十五日には……（三）補入の形なり

○三月三日は、のどやかにてりわたりたるこそよけれ、もゝの花のいまさきはじめたる、やなぎなどおかし、こぞよりさきたれば、はひろになりたるにくし、あまりとくさきて、ちりたるとしもありかし、それいとわろし、おもしろくさきたるさくらを、ながくおきて、おほきなるかめにさしたるこそ、わざとまことのはながめにさしたるよりもおかしけれ、さくらのなほしいだしうちきなどしたる、まらうどにまれ、御せうとのきんだちにまれ、そこちかうゐて、物がたりなどした

るいとおかし、そのわたりにひとりむしのひたひつきは、いとうつくしうて、とびありくもおかし

とあるを見るに、傍点を付した所は三巻本と異なる語である。前田本に殆ど同じ。前田本は、正月一日の春に、

やなぎなどいとおかし、それもまゆにこもりたるこそおかしけれ、はひろになりたるはにくし……（傍線の所のみ異なる）

とある文は堺本と本文といえよう。

○四月のころもかへいとおかし（前田本に同じ）

○よろづよりもわびしげなる車に（二〇八）

上巻の最後は、

（祭の）かへさこそまさりておかしけれ……うりうゐん、ちそくゐんなどのほどにたてるに、車どものかざり、あまりあきおほくさしこみてはあらず、さほらかにたちたるなどいとおかし、日はいできたれど、そらは猶うちくもりたるに、いりてきかむともこそとある。前田本に同じ。齋院の帰途の條である。次の上巻は、巻頭、

よるもめををさまし、おきゐつゝ、まつほとゝぎすのあまたさへづるにやと、きこゆるまで、なきひゞかすを、いみじうめでたしとおもふに……

とある。これは三巻本の二〇八段の途中である。この分割

は不自然である。

○せちは五月五日にしくはなし（三七）

この段は、三巻本の二〇九、二一〇段の文を含む所がある。

○月のいとあかきに川をわたれば（二一八）前田本同文

五月のしやうぶ（二一六）

よくたきしめたるたきもの（二一七）

○六月はつかばかりいみじうあつきに 三巻本なし、前

田本同文

○いみじうあつききる中に（一八五・一八六）前田本同

文

七月のついたちなどは（三四）前田本同文

○七月十日よひばかりのいみじうあつきに（六八）前田

本同文

○七月つごもりがたに（四二）前田本同文

○八月ばかりしろきひとへの（一八三）前田本同文

○のわきのつとめてこそ（一九一）前田本同文

○九月ばかり夜ひとよふりあかしたるあめ（一二五）前

田本同文

○おなじ月のつごもり（一九〇）前田本同文、三巻本

（一九〇）の後半風はの一段を書いたのは編者の細

かい読みか。

しも月のついたちところに……（三巻本なし）

ゆきはいたうたかうもふらず（一七六）

わざとものぼらず、なからはしもながら、ものがたりなどす、このころよのなかにきこえけることどももの、あはれなるもをかしきも、またうたがたりなども、さまぐのどやかにしかはすを、かたみに、よしあしもきゝわかず、かつはまたたはぶれごともしひて、おかしきことにうちわらひなどもことにしたがひていひかはすほどに、冬のよもあけがたになりにつけり、かねのおとさへきこゆるに、（あやしくてもなどいひながら、なほうちにもとにも、このいふことどもは）あかずあらんかし、あけくれのほどにかへるとて、ゆきくうざんにみてりと、うちずむじたるは、いとをかしとおぼゆべし

とあるのは、堺本の増補として注目すべき文である。

○雲のいみじうふりたるに（前田本と異なる）

○冬のいみじうさむきに（六九の後半）

ときは木どもおほかるころ（六八）前田本なし

りんじのまつりは（二〇八）

うちにてみるはてうがくいとをかし（七二の後半）

ほそどのゝつぼねなど（三巻本なし）

賀茂のやしろのいちのはし 三巻本（一三七）になし
ものは行幸に（二〇八後半、増補あり）

○十二月十日よひの月（前田本同文）

○わかきひとのかみうるはしく（前田本同文）

なをしすがたなるひとの（三巻本、前田本なし）

○またいみたがへなどして（前田本同文）

○ひとのむことやがてその御かたは（三巻本、前田本なし）

おもやうよき人（二七七の一節）

○またゆきのかきくらしふりたるに（二七七の一節）前

田本同文

○すきくしてひとりすくしたる人（二八四）前田本同

文

うちふりたる家（三巻本なし）

すべてうちわたりのやうに（三巻本なし）

五節のころ（三巻本なし）前田本同文

よにわびしくおぼゆることは 三巻本なし、前田本同

文

○うちのつばねは（七二）差あり

とのもつかさこそ（四五）

ほそ殿にひとくゝゐて（四四）

わかくてよきをとこの（五五）

みやつかへどころのつばねなどに（三巻本なし）

だうしもあるはよきことなれど（前田本同文）

○なつなどのいとあつきにも（三一）大差あり

けさう人にてきゝつるは（七〇）差あり

○おもはんこをほふしになさんこそ（五）前田本同文

ものへゆくみちに（二二二）前田本同文

わかき藏人のかうぶりえて（一七二）

女のひとりすむいへなどは（一七三）

みやづかへびとのさとなども（一七四）

ひとのまへちかくるたらんを 三巻本なし、前田本に

類す

きよげなるをとこどものごすごろくうつ 前田本、正

月一日の巻中の文と同文

あるところになにのきみといふ人（一七五）

○よろづのことにより人はなきけあるこそ（一五三）前

田本同文

○ひとのうへいふとて（二五四）前田本同文

○ひとのかほのとりわきてよし（二五五）前田本同文

○ありがたき心あるものは 前田本同文

○おなじひとながら（一八一）前田本同文

かたつかたゆたけにきぬたつひと（三巻本なし）前田

本同文

みやづかへびとのそこにてものくふ（一八九）

かりそめなどにてたえぬるひとは 三巻本なし

をんやうじのずきのわらは(二八三)

世の中になほいと心うきものは(二五一)

またきよげなるひとをすて(二五二) 三巻本の後半なし

○たくみのものくふこそあやしけれ 前田本同文、三巻本なし

いろくろくかほにくさげなるひとの(一〇五)

○いまはじめていふべきにもあらねど 前田本同文

○をとこまみいとよき人の 前田本同文

○十八九ばかりのひとの(三巻本一八三の一節) 前田本同文

すゞりきたなげに 前田本同文、三巻本なし

○人のむこはものしり 前田本同文

○をとこはかたちこまかに 前田本同文

○あめいみじういみじうふりたらんとき(二七六後半)

さて二三年も四五年もたえたる人なりとも、月のいみじうあかゝらん夜きたらむはしも、なかゝあはれるなるなん、すべてすぎぬるかたのあはれも、人のこひしきことなりとも、月にこそまさりおもひいでらなれ、こまのゝものがたりのあはれることは、なにゝよりうひものとおもひなかされ、きしかたゆくさきのことまで、月にはおもひあかしつるものを、雨にはさ

やはある、心ぼそくさしあたりたることこそあれ、風のあらきなどには、たゞものおそろしくおぼえて、げにそのほどにたのもしからん人のきたらんは、いかばかりかはうれしからん、さりとてそれを、めでたくふかき心ざしにすべきにもあらず、かみにいひつることく、つねにこのむ人のさあらむは、まことにあはれにもうれしくもありぬべし

三巻本と全く異なる文である。前田本は、

たちながらものいひてかへし、またとまるべきところとはとめなどもしつべし、月のあかきみるばかりものとはうおもひやられ、すぎにし事うかりし、うれしかりしも、おかしとおぼえしも、たゞいまのやうにおぼゆるおりやはある、こまのものがたりなばかりおかしき事もなう、ことばもふるめき、み所もなければ、月にむかしおもひいでゝむしくひたるかはほりとりにてゝ、もとみしこまにといひてたづねたるがあはなるなり、あめはこゝろきもなきものとおもひしりたれば、かたときふるも、いとにくゝぞある、やむ事なきこと、おもしろかるべきこと、たうとくめでたきにも、あめだにふれば、いふかひなくくちおしきに、なにかそのぬれてきたらんめでたからん、げにかたのゝ少将、六條にきたるおちくぼの少将などはおかし

……(小白河の巻)

とあり、三巻本に類する文である。この点みれば、堺本は三巻本より遠ざかった独自の本文と認められよう。

しのびたるところよりあかつきかへらむ人は(六〇)

三巻本、前田本と差あり

めでたきものは、

めでたきものは、きさひのみやの御ありさまこそあれ、むまれかへりても、なる世ありなんや、みやはじめのさほう、御へついななどわたしたてまつるありさま、このよの人とやはおほゆる、なにがし殿のひめ君、中きみなどきこえたるほどは、わろからねど、なをひとつくちにいふべくもみえぬや、ひるありかせたまふおりに、女ばうのくるままづみなりて、ひきたていでさせたまふを、まつほどに、えもいはずかうばしきにほひうちかゝへて、みこしの、やう／＼うちゆるぎておはしますを見るは、おまへちかうまいるわが身さへぞあなつがはしくおほえぬ……

三巻本(八四)とも異なり、又前田本のめでたきものとも異なり、堺本は上巻に「めでたきもの」があり題目としては重複するが文は異なる文である。

正月一日はらかなどみるやうにてやむ

業遠朝臣の事など、三巻本の一本(二八)に類する。

正月にてらにこもりたる(一一六)

みただけにまうずるみちのなかは(一一五)

右衛門佐宣孝の事あり、三巻本、あはれなるもの(一一五)に類する。前段と続くのでここに並べたか。

以上にて堺本の下巻を終わる。

さて三巻本にありて堺本になき段は、次の如くである。

○点の段は重要な記述である。

二	三	四	六	七	九	一〇	一一	一九	二一	二二	二四	二七	二九
三二	三三	三四	三六	三八	四〇	四六	四七	五一	五四	五六	五八	六五	六六
七三	七四	七七	七八	七九	八〇	八二	八三	八四	八六	八七	八八	八九	九五
九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇九	一一〇	一一二	一一三	一一四

一七〇	一六九	一六〇	一五七	一五六	一四六	一四一	一四〇	一三八	一三七	一三六	一三四	一三三	一三二	一三一	一三〇	一二九	一二八	一二七	一二四	一二七
二二一	二二五	二二四	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一四	二一〇	一九五	一九四	一九三	一八八	一八七	一八二	一七九	一七八	一七七	一七四	一七一
二五六	二五〇	二四九	二四八	二四六	二四五	二四四	二四二	二四一	二四〇	二三九	二三八	二三三	二三二	二三一	〇二三〇	〇二二九	二二七	二二六	二二五	二二四
〇二八四	二八二	二八一	二八〇	二七九	二七八	〇二七六	二七五	二七四	二七三	二七二	二七〇	二六九	二六七	二六四	二六三	〇二六二	〇二六一	二五九	二五八	二五七

右の表によりて重要な段をみると、

二八五	二八六	二八七	〇二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二
二九三	二九四	〇二九五	〇二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇
三〇一	一本	二	一一	一三	一四	一五	一六
一七	二五	二六	又一本	目もあやなるものアリ			

- 六 大進生昌が家に
 七 うへにさぶらふ御猫は
 二一 清涼殿の丑寅の隅の
 三三 小白河といふところは
 三四 七月ばかりいみじう暑ければ
 三八 花の木ならぬは
 四七 職の御曹司の西面の立部のもとに
 七四 職の御曹司におはしますころ木立など
 七八 頭中将のすずるなるそら言を聞きて
 七九 かへる年の二月二十余日
 八〇 里にまかでたるに
 八二 さてその左衛門の陣などに行きて後

八三 職の御曹司におはしますころ、西の廂に
八四 めでたきもの

八六 宮の五節いださせ給ふに

八八 内裏は五節のころこそ

八九 無名といふ琵琶の御琴を

九五 五月の御精進のほど

一〇〇 淑景舎、東宮にまゐり給ふほどのことなど

一〇二 二月のつごもりごろに

一三一 頭の弁の職にまゐりたまひて

一三二 正月ばかり月もなういと暗きに

一三七 なほめでたきこと

一三八 殿などのおはしまさで後

一五六 故殿の御服のころ

一五七 宰相の中將齊信、実方の中將、道方の少納言

などまゐりたまへるに

一七九 宮にはじめてまゐりたるころ

二二九 社は

二三〇 一條の院をば新内裏とぞいふ

二六一 御前にて人々もまたものおほせらるるついで

などにも

二六二 関白殿二月二十一日に法興院の積善寺といふ

御堂にて

二七六 成信の中將は

二八四 三月ばかり物忌しにとて

二八八 うちとくまじきもの

二九五 大納言殿まゐりたまひて

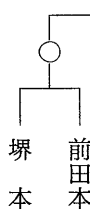
二九六 僧都の御乳母のままなど

三十六段に及ぶのである。これらの段は特に注目すべき段であらう。清少納言の体験が多く語られた長文である。従つてこれを缺脱した枕草子は大きな缺脱本と認むべきで、異本としての存在価値を少なくする伝本である。前田本も又同様であるが、前田本よりも缺脱が多い。

さてこの前田本、堺本の成立を如何に考ふべきかが問題である。現存の三巻本を原形に近いものとして固定して考察すべきであらう。その前提がなくては一步も進まない。その三巻本を基として、「……は」と「……もの」に分けて記事（段）を分類しようとしたのが前田本、堺本の第一段である。前田本はやや、「……は」の順序は整った感をあたえるが、堺本は一定の方針はなさそうである。その他の記事（段）の構成は、正月より十二月に及ぶ時間的推移に従つて配列した如くである。と同時に文章を自由に改変したのである。これが次の問題をひき起こすのである。三巻本の文をそのままに分類配列したものならば、本文批判としてはやや安易に考察ができれば。本文を自由に改変し

原本（三卷本）

(現存本)



と容易でない。

一例をあげると、前田家本に（正月一日の巻）

七月十よ日ばかりのひざかりのいみじうあつきに、
おきふしいつしかゆふすゞみにもならなむと思ほどに
やうくくれがたになりて、ひぐらしのはなやかに
きいでたるこゑきゝたるこそものよりことにあはれに
うれしけれ

とあり、堺本（下巻）に、

とあり、**堺本（下巻）**に、

本の批判として特立して取りあつかうことになるう。

さて次の問題は最も難しい問題で、前田本と堺本に同文と認むべき多くの段がある。普通の場合には、ある原本が増補されてその増補（改訂）の本文が後の異本に継承されて前後が判定されるのである。前田本、堺本の場合には、全体

七月十日よひばかりのいみじうあつきにおきふしい
つしかゆふすみにもならなむとおもふほどに、やう
やうくれがたになりて、ひぐらしのはなやかにいき
でたるこゑきゝつるこそ、ものよりことにあはれにう
れしけれ（前田本同文）

は同文でないが、ある多数の段は同文である。この場合、先にある枕草子が存在したとならばそれによって分類配列したと認められよう。然し前田本の前に存在した伝本、堺本の前に存在した伝本は発見されていない。又一方では前田本が堺本の前にあつてそれによつて堺本が成立した考と反対に、堺本が前にあつて前田本が後に成立したという考が推定せられる。この場合、ある段のみを考察の基準にすれば簡単である（前記、堺本、あめいみじうふりたらん時

しのびたるひとのかよふには、夏のよこそをかしけれ、いみじうみしかく露もまどろまぬほどにあけぬるよ、やがてよろづのところもあけながらあれば、すゞしげにみわたさるゝが、猶いますこしいふべきことゝものはのこりたる心地すれば、ふともえたちさらでかたみになにくれといひかすほどに、たゞこのゐたるうへに、からすのたかうなきてゆくこそけむせうなる心地してをかしけれ（三巻本六九を続けたもの）

まつたかきひむかしみなみなどのかうしあげとをしたらば、すゞしげにみゆるに、もやに四尺の几帳たてたるまへに、わらうだうちおきて、三十ばかりなるそのの、いときよげなるうすもののおへもけきなどいとおやかにさうぞきて、かうぞめのあふきうちつかひつゝ、だらにのみゐたるこそ、ものきよげにみゆれ、もののけにいたくなやむひとにや、うつすべきひととて、おほきやかなるわらはの、すゞしのひとへ、あきやかなるはかまながやかにきなして……（一本二四）

前田本（正月一日の巻）には、

まへのはひろくこだちたかきところのひがし南のかうしどもあけわたしたれば、すゞしげにすぎとほりてみゆるにも、もやのはしらもとに四尺の木丁たてゝ、あらはにもやと、ふたあひのをり物ゝうちぎかけたるまへに、わらざばかりをうちおきて、卅一二ばかりの僧のいろしろくきよげなるが、うすゞみぞめのうすものゝもけきなどあきやかにさうぞきて、かうぞめあふぎをつかひて、千すだらにのみゐたるは、ものゝけいたくなやむなるべし、うつすべき人といへば、おほきやかなるわらはのすゞしのひとへにあきやかなるはかまながやかにきなして……（一本二四）

とある。前田本が前であらうか。後であらうか。判断に苦

しむ所である。

又一例をあげよう。前田本、

かぜは、木がらし、三月ばかりのゆふぐれにゆるくふきたるあさかぜ、また八九月ばかりなどあめにまじりてふきたるかぜ、いとあはれなり、あめのあしよこざまにさはがしうふきたるに、夏とをしたるわたきぬのあせのすこしかゝえたるに、すゞしのひとへにひきかかねてきたるもおかし……

堺本は、

風は、あらし、木がらし、二三月ばかりのゆふつかた、ゆるくふきたるあまかぜ、又八ばかりのあめにまじりて、ひやゝかにふきたる風もおかし

これも文の長短のみでは何れを先とも判定し難い。日は、月のは段も、三巻本、前田本は長文、堺本は簡である。堺本が前田本によつたとすれば、前田本にありて堺本になき段をみると、

二	二九	三八	七七
二一	三二	四〇	八四
二二	三三	五八	八六
二四	三四	六五	九〇
二七	三六	六六	九五

